

思い出のひとこま : 小原先生

著者	廣西 信子
雑誌名	日本文學誌要
巻	23
ページ	135-135
発行年	1980-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019290

思い出のひとつま

——小原先生

廣西 信子

私達昭和四四年三月卒業のゼミは、実はこの私もその一人なのですが、ウドの大木のような女性が四、五人占めていました。その内でスペイン的な華やかな美女、N嬢は特に先生のお気に入りでした。そのN嬢、沈着・冷静——関係ナシ。インテリジェンスなんのそのという具合で、誰もがごく普通に持ち合わせている「重み」なぞというものには全く無関係に、ハタチ迄の年月を過ごしてきたような女性でした。

そしてN嬢の精神構造は、あらゆる教育のヘイガイにも犯されず、ウブというのか、あけっぴろげで裏からの思索など思いもよらない、そして又同情心の厚い、しかも疑うことのないストレートな同情心を持ち合わせた人でした。

先生とそんなN嬢の宴席でのやりとり程、見ていて心温まるものはありません。N嬢は下戸なのか上戸なのかさっぱり訳のわからない飲み方で、小原先生にポンピンと言ったのけます。先生は酔いがまわりつつも、彼女のおしゃべりに負けまいと、一生懸命言い返します。そして突如、あまりにかけ離れたN嬢の幼子のような意見に

ぶつかって、ほんとにお手あげという表情をして、笑いとタバコの煙が混ぜこぜになってはき出されます。

そんなN嬢が同じゼミのH君と結婚すると宣言した時は、彼女の健気ともみえる純な精神を愛してらした先生は、貴重な彼女の気風がそこなわれることのないよう随分心配をしていました。そしてH君と結婚してからも、昔ながらの彼女の変わらない姿にホッとされているようでした。

私達は卒業後も幾度か「会合」を持ちましたが、その折などお酒がすすんで、そういう時のクセになっている目をパチパチしばたかせながら「N嬢が又、子供を生むんだって」などとおっしゃっている先生のお顔は、人の好い豊かなやさしさを強く感じさせられました。N嬢に限らず、本当に人間好きな小原先生でした。先生の回りにはいつも生徒がとり囲んでいたような気がします。まだまだ私達の年齢では次々いろんな事が起こるでしょう。そういう未来の出来事を聞いてもらえないのが残念です。